メタ認知的判断の正確さに個人差はなぜ生じるか —学年・性別・学力・パーソナリティ特性の検討—

久坂哲也 (岩手大学)

キーワード: メタ認知的判断, 正確さ, 個人差

問題と目的

自己の学習遂行に対して正確にメタ認知的判断を行うことは、自らの学習を適切に運用する上で欠かせないが、学習者は過大評価や過小評価をする傾向があることが報告されている (e.g., Kruger and Dunning, 1999)。また、大学生を対象とした研究では、自己愛傾向やビッグファイブのようなパーソナリティ特性がメタ認知的判断の正確さを歪めている可能性が示唆されている (e.g., Buratti et al., 2013; de Bruin et al., 2017)。そこで、本研究では自己プロセスが大学生に比べて未発達な中学生を対象に、メタ認知的判断の正確さに個人差が生じる要因について学年発達、性別、学力、パーソナリティ特性に着目して検討することを目的とした。

方 法

調査対象者と手続き

岩手県内の国立大学附属 A 中学生 1 校の全校生徒 440 名を対象とした。調査は 2019 年 9 月に理科の授業時間内において、質問紙への回答、学習テキストの読解、事前のメタ認知的判断、理解度テスト、事後のメタ認知的判断の順で実施された。

学習テキスト

飛行機の揚力について説明する学習テキストを作成し、翼の形状や揚力が発生する仕組みについて解説した。文字数は 1,434 字であった。

質問紙

中山・中谷 (2006) の自己愛傾向尺度と並川ほか (2012) の Big Five 尺度短縮版を援用した。

結果と考察

理解度テスト前に実施する事前の予測的なメタ認知的判断とテスト後に実施する事後の回顧的なメタ認知的判断について、判断値及び判断値とテスト得点の差分を示すバイアス指標をそれぞれ従属変数として階層的重回帰分析を実施した。その結果、いずれにおいても学年の影響は見られなかったが、性別と学力 (調査協力校で実施された理科の期末試験の得点) は影響を及ぼしていることが示された。特にバイアス指標との関連を見ると、学力の高さはメタ認知的判断を過小評価させることが示された。また、パーソナリティ特性に着目すると、自己愛傾向の下位概念である誇大性は、メタ認知的判断を過大評価させることが示された。

先行研究でも同様の結果が示されているが、先行研究の多くは大学生が対象である (e.g., Handel et al., 2020)。しかし、大学生に比べて自己プロセスが未発達な中学校段階において、既に自己愛傾向といったパーソナリティ特性は、自己の学習遂行に対するメタ認知的判断を歪めている可能性が示唆された。今後は、学習観や学習動機など関連する自己概念を加えた検討も必要だろう。

Table 1 階層的重回帰分析の結果

	事前判断 (判断値)		事後判断 (判断値)		事前判断 (バイアス指標)		事後判断 (バイアス指標)	
	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β
Step 1	.17***		.20***		.04**		.07***	
学年		.07		.15**		.00		.11
性別		-.26***		-.29***		-.16**		-.23***
学力		.28***		.24***		-.15*		-.16**
Step 2	.08***		.07***		.05*		.06**	
評価過敏性		-.14*		-.17**		-.05		-.11
誇大性		.15**		.12*		.20**		.18**
外向性		-.11*		-.11*		-.02		-.04
開放性		.21***		.18**		.08		.07
情緒不安定性		.03		.01		.04		.02
誠実性		-.05		-.02		.01		.03
調和性		-.01		.03		-.01		.04

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$